

ブラシ屋

ブラシ屋と聞き、私が思い出したのは、学生時代のクラブの友人だ。

探検クラブという馬鹿馬鹿しい名前のわりには、結構まじめな同好会で、実際、テレビ局の下請けまでやっていた。

初めて全員が集まった新人歓迎会は、行きつけの居酒屋で行われた。

隣に座った小太りの男を、私は〇〇か先生と勘違いし、敬語を使って話していた。

自分と同じ新入生だとわかった後も、信じられなかった。

世界の不思議なんていうよりは、この男が十九歳だということのほうが、この世の不思議だ。

なにかから話がすすんだかは忘れたが、家の職業になったとき、

「俺んちは刷毛屋というか筆屋なんだよ」と、彼は言った。

「いい着物があるとするだろう、その着物には、刺繍や染めやいろんな技が盛り込まれているんだ。友禅って知ってる？」

その職人さんが使う筆を、俺の親父が作っているんだよ。

筆の毛って、色んなものを使うんだ。

たぬき、テン、ミンク、外国からも輸入していて、家にはそんな毛がたくさんあって、ねずみが狙いに来るんだ。

だから、猫や犬がごろごろいて、おれや兄貴は猫や犬といっしょに育ったんだ。

子どもよりそっちのほうがえらいんだ。

だってうちの毛を守ってくれるんだから。」

男ばかりの七人兄弟。

そんなやつが、自分と同じ世代にいるなんて。

ビールの酔いも醒めて、私は彼の話に聞き入った。

気がついたら、飲んで話しているのは私たち二人だけだった。

どちらも酒に強いのだと、そのとき知った。

空は白み始め、筆屋の息子は、「洗うぞ」と、私に言った。

何のことか、わからなかった。

この店が、同好会の部室みたいのもので、居酒屋の主人は、学生に鍵を渡して、先に帰ってしまうらしい。

「奥に、先輩たちが寝ているよ」
と、彼は教えてくれた。

二人で、使った皿を洗った。

ビール会社のロゴ入りのコップは、どこにしまっ
てよいかわからず、お盆に伏せておいた。

そして、「じゃあ」と言って別れた。

ふと、そんなことを思い出した。

あの、おっさんのような男は、どうしている
だろうか。

お茶を飲みながら、その店の乳香と呼ばれて
いるらしい物をそっと触ってみた。

不思議な香りがします。

店主に勧められ、鼻先に持っていった。

樹液の一種ときき、なんだか納得した。

木の中に入り込んだような、そんな香りが
する。

乳香は、ハリネズミが載っている台の中
に隠れている。

乳香より、私は、このハリネズミが好
きだ。

松ぼっくりのかきで出来ている。

一見、松ぼっくりをそのまま使っている
ように見えるが、実はかきを一枚一枚
丁寧にはがして、胴体部分に器用に
張り合わせてある。

鼻先のとがり方、黒い目のかわいさ。

店主のお気に入りらしいが、私だって大好きだ。

「目の見えない方が作っているんです。」

そう聞いて驚いた。

デンマークのものらしい。

「ブラシ屋なんです、その店は。」

いくつか、かわいらしいものもありましてね。

つい手にとってしまったんです。」

「ブラシ屋か」思わず口にした。

「そう、小さな刷毛から、大きなデッキブラシまで、
すごい種類でしたね。」

店主は思い出すような口ぶりでそういった。

「あれはすごかった。」

私はもういちど、ハリネズミに目をやる。

手のひらに載せてみる。

目をつぶって、そっと触ってみる。